

「神学校のクラス会」

2014年09月03日

フィリピの信徒への手紙 2章 25節～30節 ところでわたしは、エパフロディトをそちらに帰さねばならないと考えています。彼はわたしの兄弟、協力者、戦友であり、また、あなたがたの使者として、わたしの窮乏のとき奉仕者となってくれましたが、しきりにあなたがた一同と会いたがっており、自分の病気があなたがたに知られたことを心苦しく思っているからです。実際、彼はひん死の重病にかかりましたが、神は彼を憐れんでくださいました。彼だけでなく、わたしをも憐れんで、悲しみを重ねずに済むようにしてくださいました。そういうわけで、大急ぎで彼を送ります。あなたがたは再会を喜ぶでしょうし、わたしも悲しみが和らぐでしょう。だから、主に結ばれている者として大いに歓迎してください。そして、彼のような人々を敬いなさい。わたしに奉仕することであなたがたのできない分を果たそうと、彼はキリストの業に命をかけ、死ぬほどの目に遭ったのです。

神学校のクラス会があり、出席してきた。4年毎に開いてきたが、年を取ってきたので、2年毎になり、今年は東京で持たれた。1967年に卒業した私たちのクラスメイトは37名で、大人数のクラスであった。その内5名が帰天された。会に出席したのは10名、2人が奥さんと同伴し、計12名であった。北海道から沖縄まで、全国に散らばっている。また、病気の人、病気の家族を抱えている人、多忙の人などで、出席者が少なく、いささか寂しい会になった。殊に、病気で来られない友だちが返信してきた近況報告には胸が痛んだ。卒業して47年が経つ。それぞれが年齢を重ね、老人会のようなであったが、話すと、学生時代と変わらない人柄がにじみ出て、昔を懐かしく思い出した。

牧師は色々な出会いがあり、様々な経験をさせられる。一人5分ずつのスピーチを3廻りくらいして、互いの伝道、牧会、家族、近況などを報告し合った。牧師同志なので、その状況が手に取るように理解し合える。神学校のクラス会は心おきなく、楽しい。6年間、寮で同じ飯を食い、伝道という使命を持って生きてきた同労者であるから、出世もなく、優劣もなく、横一列である。互いの健闘を喜び、苦労に同情しあえる。

今回のクラス会は互いの年齢をひとしお感じた。まだ現役の牧師もいるが、隠退した者、隠退に備えている者など、終わりの時を迎えていることは確かで、死の準備についても話はずんだ。しかし、神に用いられてきた感謝と喜びを共有し、召される日まで、伝道の使命に立って生きよう、それが可能であると話し合った。

上記のフィリピ書は、散会前の礼拝で示された御言葉である。獄中のパウロに、フィリピ教会は贈り物を託して、エパフロディトを送り出した。ところが、エパフロディトはパウロの所で、瀕死の病気になった。世話をするために来たのに、逆に、パウロに心配をかけるような状態になった。パウロは、役立たずにフィリピに送り返すエパフロディトを執り成している。「彼はわたしの兄弟、協力者、戦友であり、また、あなたがたの使者として、わたしの窮乏のとき奉仕者となってくれました。」また、私に奉仕するため、キリストの業に命をかけ、死ぬほどの目に遭った彼を歓迎し、敬いなさいと言っている。エパフロディトに対する、牧会者パウロの優しい息づかいが伝わってくる。

パウロのような牧会者でなかったことを、皆感じたであろう。しかし、それも「よし」としてくださった恵みを受け止めて、帰って来た。